彙　報　表現文化学科　学科・各コースの歩み

【学部学科】

表現学部が新設され、文学部表現文化学科から表現学部表現文化学科となって一三年目の年度となった。榎本了壱学部長の下、コースの再編が実施され、今年度は新コースが第二学年と第三学年となった。同時に、クォーターが実施の学年もまた第三学年まで進んだことになる。令和二年度からコース別に学生を取らなくなったため、二年生からこのコースに分れることになって第二・三学年が編成されている。四年生はいよいよ最後の二期制の、セメスター制学年である。

四月一日に入学式が行われ、ガイダンス期間を経て、今年度から対面で授業が開始となったが、表現学部は前年度も対面を多く用いていた授業を展開していたため、大きな混乱もなく、対面授業が開始された。今年度からオンデマンド形式の授業も導入されたため、オンデマンドによるⅡ類授業も開始された。二年生に必修の学融合ゼミナールⅠも開始となった（なお、三年生にはⅠ類科目「学融合の実践学Ⅰ」が開講された）。

依然コロナ禍で万全の感染症対策の対応を求められる中でもあっても、各コースは出来うる限りの活動をし、授業を展開し、学生の活発な活動の下、コースに就職にと成果を残した。詳しくは各コースの項を参照いただきたい。

屋外での実施を避けざるを得なかった光とことばのフェスティバルも、二年ぶりに中庭での実施を復活。初のＰＢＬⅢを導入し、ＰＢＬⅡ・Ⅲでもできうる限りの活動を行った。

今年度は定員二〇五名に対して、二六九名の新入生を迎えることとなった。入学式後の学科ガイダンスも二会場に分割しての展開となり、ガイダンスや表現基礎ゼミナールも大教室を二教室使う形で展開することとなった。この人数に対して、学科事務室はじめ万全の態勢で臨んだことは言うまでもない。再来年に二五名の定員増が予定され定員二三〇名体制への前哨戦となる対応を求められているとも言えようか。

コロナ禍で長期の対応を余儀なくされているが、高等教育機関として最善の道を取るべく、日々努力している。

【学科一学年】

○令和四年度

新入生は二六九名を迎え入れた。一昨年度よりコース別の入学者ではなく、学科としての入学者のため、二年次に進級の際、四コースに分かれる形となった。

昨年度に続き、表現基礎ゼミナールⅠ・Ⅲ・Ⅴはセルフマーケティングを基礎とした領域で、川喜田尚任期制教授・松崎泰弘任期制教授・外川智恵任期制教授に第一・二・四クォーターで担当していただいた。ここで表現学部の学生としての全般を見据え、網羅した学修を行い、表現を学ぶ学生の基礎学を学んでもらった。

表現基礎ゼミナールⅡ・Ⅳ・Ⅵは各コースの入門講座に位置付け、第一・二クォーターを展開し、歌田明弘任期制教授・山田潤治准教授・徳永直彰准教授・北川仁任期制専任講師・ヨシムラヒロム助教に基礎ゼミⅡを、Ⅳは徳永・山田・ヨシムラ各先生に加え、北川先生に代わり松崎泰弘任期制教授、歌田先生に代わり佐藤哲至任期制専任講師が担当、Ⅵでは松崎先生に代わり的場真唯専任講師が担当され、第四クォーターではコース別の授業も展開した。一昨年度より第一学年の専門のⅡ類科目は、表現基礎ゼミナールⅠ～Ⅵのみとなったため、この布陣を敷いている。

【クリエイティブライティングコース】

【情報文化デザイン（文芸）コース】

○令和四年度

情報文化デザイン（文芸）コースは二年生二〇名、三年生二八名、クリエイティブライティングコースは四年生三一名（休学中一名含む）、二・三・四年生で計七九名となった。（なお、学科改革のため令和五年度入学の一年生よりコース名称がクリエイティブライティングコースに復することになった。）

令和三年度の就職率は八八・〇％（令和四年三月卒、令和四年四月時点）となった。卒業後の生活設計に際し就業と創作活動の両立について深慮するのがコース学生の平均像となりつつあり、同時期での比較では昨年度よりも就職率が高くなっている。さらに、追跡調査や卒業生自身の報告により、卒業後数か月を経て就職を決めるケースも少なからずあることも付記しておく。

スタッフは、中村亮二教授、森晴彦教授、教務主任・徳永直彰准教授、中島紀子専任講師、長薗安浩・海老原嗣生各特命教授、井沢元彦・後藤国弘・サエキけんぞう・

江藤茂博各客員教授、笹公人・額賀澪各客員准教授の先生方に担当いただいた。非常勤講師は、長谷川哲夫、川勝麻里、高橋秀城、東順子、名嘉真法久、齋藤秀昭、魚尾和瑛・北林茉莉代・坂巻理恵子の先生方に引き続き授業を担当いただいた。なお、江藤茂博客員教授は本年度をもって退官されることになった。

授業に関しては、年度初頭より対面授業が復旧した。一方一部科目ではオンデマンド授業も展開しており、情報社会の深化に対応した学習効果の向上をはかっている。

昨年度より開始されたコースＰＢＬは、二年次・三年次が第三クォーターで開講となった。

二年生のＰＢＬⅡでは、昨年度の同学年に引き続き「もう一つの街物語」という学科全体のテーマに沿い、日本近代文学の作家である夏目漱石・田山花袋・島崎藤村・宮沢賢治・太宰治・川端康成を取り上げ、グループに分かれて作家ゆかりの街や作品に登場する街、関連文学施設などのフィールドワークを実施、その成果をグループレポートとしてまとめた上で、各人がそれをふまえた小説作品の創作をおこなうという授業を展開、成果物を収録したデジタル冊子を制作した。

三年生ＰＢＬⅢでは、現代作家の研究をおこなうというテーマを設定し、今回は芥川賞作家・李琴峰先生を取り上げ、グループに分かれてそれぞれ設定した主題に沿い、李作品の精読・関連資料の調査・関連作品との比較検討などをおこない、グループレポートにまとめ、デジタル冊子を制作した。また、レポート完成に先立ち、李先生には授業後半にご来校いただき、レポート内容を題材とした各グループの発表にコメントをいただいた。李先生には前もって各グループの研究主題や進捗状況を担当教員から伝えており、学生との質疑応答でも踏み込んだ議論が展開した。さらに、グループレポートとは別に、学生各人が今回の研究成果としての創作プロットを制作、プレゼンテーションをおこない、実践的・多角的な学びを実現できた。

二年生のキャリア教育授業「リーダーシップⅢ」（第四クォーター）では、二〇二一年秋に第四十七回新沖縄文学賞を受賞した卒業生・仲本圭吾（筆名・円井定規、令和元年度卒）を招聘、学生時代の学びや就職活動、卒業後就業の傍ら新人賞に投稿する経緯、創作における主題設定や着眼の実際などを語ってもらった。学生からの質問も具体的なものが多く、仲本氏本人も多くの刺激を受けたようで、身近な先輩と後輩が相互に影響し合う立体的な教育の効果を確認することができた。

コース学生の課外活動としては、第八回「うえだ七夕文学賞」でコース所属の学生四名が「自由詩」の部門で授賞・入選したことが挙げられる（優秀賞＝川原田桃子〈四年〉、秀逸賞＝日下部瑠夏〈二年〉、入選＝石井奈津希〈三年〉・八坂遥香〈二年〉）。また、上記各人の受賞と共に「大正大学表現文化学科」として学校特別賞（多数の優れた作品の応募があった学校に与えられる賞）を受賞したことも喜ばしい。

【出版・編集コース】

【情報文化デザイン（編集）コース】

○令和四年度

令和二（二〇二〇）年度のコース再編によって、二年生二四名、三年生三一名は情報文化デザイン（編集）コース、四年生三六名は出版・編集コースの所属である。

二〇二〇年度以来、新型コロナ禍のなかで授業することを余儀なくされてきたが、今年度は、対面の授業となった。今年度より第三クォーターは三年生までＰＢＬの期間となった。

二年生のＰＢＬⅡは、学科全体が「もう一つの街物語」というテーマのもと活動したが、本コースの学生は前年度同様、三人もしくは四人からなる七つのグループに分かれ、このテーマに沿った特集をそれぞれ考え取材し、雑誌記事を制作した。学生が考えた特集は次の通り。「渋谷・銀座・下北沢　街によって変わるファッション」「カラーパレットで見る街」「関東の小さな旅」「アニメと絵本　作品の世界を覗いてみる」「カフェと暮らしと私」「街の裏」「街で触れ合える水辺の生き物」今年度もバリエーションに富んでいた。

第三クォーターで各自八頁見当の記事を作成し、第四クォーターは、特集グループごとに記事を合体し、各自それに表紙と目次を加えて自分の雑誌を完成させた。

デザイン面は岡本洋平客員准教授、宮吉知恵子非常勤講師の指導を受け、企画や文章、制作進行のアドバイスは専任教員がしたが、学生のデザイン力はよりいっそう上がり、デザイン担当教員が驚く出来栄えになった。新コースになってデザインに関心のある学生が多く入ってきたことに加え、以前はもっぱらマック教室の授業時のみ制作していたのが、二年次冒頭からアドビ・クリエイティブ・クラウドを学生自身のパソコンにインストールして使えるようにし、いつでも制作できるようにしたことでレベルが上がったものと思われる。

三年次の春学期では二年次の雑誌のコンテンツを使ってウェブを作成した。同じコ

ンテンツでもメディアの違いによって発想が異なることに、当初はとまどったようだが、二年次の第四クォーターから佐藤哲至専任講師のウェブの授業が始まっていたこともあり、教員の予想を超える出来のウェブページを全員作成した。

三年生のＰＢＬⅢは、卒制の準備を兼ねてインタビューや取材を行ない、記事を作成した。令和二年度より始まったＰＢＬをどのように活かすかは難題だったが、年間の学びのなかに位置づけつつ、学外に集中的に出て取材を行ない記事を作成する期間として定着するようになった。ただ連日、複数の学年の授業を同時並行させなければならないという問題は残った。

令和三年度の就職率は一月段階で八一・八％である。年が明けて就職が決まった学生もいて未報告者がいると思われるが、前年度八九・七％より下がった。しかし、例年よりも編集やデザイン職など希望した職種に決まった学生がこれまで以上にいた。メーカーやＩＴ企業に就職した学生も、広報的な分野に就くことが比較的多い。

専任教員は、大島一夫任期制教授が前年度に定年退職され、客員教授だった仲俣暁生氏が任期制教授として新たに加わり、引き続き歌田明弘任期制教授、佐藤哲至任期制専任講師の三名の体制。コース教務主任は引き続き歌田が担当した。客員教授はくらたまなぶ氏・森枝卓士氏・渋谷和宏氏。客員准教授に岡本洋平氏。非常勤講師は宮吉知恵子氏・三浦崇典氏。

【放送・映像表現コース】
【放送・映像メディアコース】
○令和四年度

令和四年度は、二年生八四名、三年生七四名、四年生七六名、計二三四名となった。

令和五年三月に卒業する放送・映像表現コース学生の就職は前年度と同様、大手企業の内定獲得が目立った。特筆すべきはＩＴサービスで国内首位の富士通に就職する学生を輩出したことである。

授業に関しては、対面授業を基本とする形式となったことで、学生同士の直接の交流も活発になり、かつての生き生きとした実習環境に近づいているのではないかと考える。しかしながら、未だグループワーク時の感染症対策には充分な注意を払う必要があり、学科教員、学科スタッフらの協力に助けられながら運用を進めている。

クォーター制学年が三年生へ進級し、第三クォーターのＰＢＬは二年生と三年生とを同時に進行する状況となったが、予算を用いながら昨年度以上に実践的な授業を展開することができた。

「ＰＢＬⅡ　コースＰＢＬ」は、「もうひとつの街物語」というテーマのもと実践的に制作。「舞台となる街を設定し十分程度の短編映画を制作」「外部取材に基づき街歩きの内容のラジオ番組を制作」「特定の街区のフィールドワークで得られた学生の研究結果をもとにデジタルブックを制作」「特定の地域のリサーチや現地で集めた写真や音などの素材をデジタルな三次元空間に配置して一人称視点で体験する作品を制作」の四通りで展開した。

「ＰＢＬⅢ　コースＰＢＬ」では、「学外の団体と交渉しつつ様々なロケーションで映画を制作」「外部取材に基づき、報道・情報関連の映像コンテンツを制作」「文化芸術の現場のフィールドワークを通じた学生の個人研究をもとに作品を制作」「企業との交渉をもとに学外のロケーションでＴＶＣＭ・ＭＶを制作」「学生がアニメーションを制作し、プロの声優のアフレコやプロの音響のダビングによって完成させる」「学生とプロの制作会社とのコラボレーションにより、一般企業の商材のブランディングや販促などの課題を解決するためのＷｅｂサイトを制作」「学生が作品制作と並行して展覧会の実行委員を組織し、学外のギャラリーにて一般の来場者向けの展覧会を企画、運営する」の七通りで展開した。

三年生と四年生のワークショップ（三年生は専門ゼミナールという科目名）も前年度から引き続き二カ年におよぶ通年クラスでの授業を展開した。卒業制作によって学びを仕上げるだけでなく、就職率の押し上げにも引き続き傾注した。就職課が初めて開催した映像関連ビジネス就活チャレンジ講座では、コーディネートや進行の面で全面的に支援。映画業界老舗の東京テアトル社長をゲスト講師に招聘するなどして学生の就活意欲向上を後押しした。

毎年開催している卒業制作展と成果報告展は、感染防止対策を講じた上で、昨年度と同様に来場とオンデマンド方式のハイブリッド型にて開催の予定である。なお、来場者は昨年度のコース学生のみから本学科の学生へと対象を拡大する見込みである。

スタッフは、昨年度の北川仁任期制専任講師から引き継いで的場真唯専任講師が教務主任を務め、松崎泰弘任期制教授、北川仁任期制専任講師、田島悠史専任講師、四名の専任スタッフ。特命准教授に六車俊治氏。客員教授に伊勢田誠治氏、中山浩太郎氏、三浦光博氏、吉田守良氏。客員准教授に大平雅美氏。非常勤講師を野間口修二氏、

川原伸一氏、池本哲也氏、北川斉氏、山本圭太氏、吉木崇氏、新里高平氏、野辺優子氏、坂口真理子氏、中澤雄大氏にご担当いただいた。

【エンターテインメントビジネスコース】

【アート&エンターテインメントワークコース】

○令和四年度

四年三月に、エンターテインメントビジネスコース六期生四六名が卒業した。今年度は、アート&エンターテインメントワークコースの二年生五七名、三年生六四名、エンターテインメントビジネスコース四年生五一名とあわせ、両コース在籍学生数は、一七四名となった。

コーススタッフは、

川喜田尚任期制教授　外川智恵任期制教授　山田潤治准教授　中島和哉任期制准教授、

客員教授　椎名和夫氏　蜷川有紀氏、内田春菊氏、荒川祐二氏、金原亭世之介氏、高橋啓祐氏　芳賀直子氏、

講座担当者　江野澤哲也、萱家ゆかり、北野信高　栗岡靖子、小林巨和、田中慈乃、根本陽平、林　寿美、松崎泰弘、望月純吉の各氏

＊

コロナ禍以前の対面授業を展開し、理論と実践に努めた。

六月一一日、コース所属の全学生を集めて、第七回卒業論文中間報告会を対面で実施した。午前中から夕刻まで、四年生および三年生全員が卒業論文の中間報告をおこない、聴衆からの質疑に応答した。

ワークショップ・ソーシャルデザイン基礎では、社会課題の解決を企業・団体と追究した。本年度は二〇二五年問題をテーマにこども（21世紀構想研究会・西尾家具工芸社）、高齢者（キャップクラウド株式会社・株式会社プラスロボ）、医療（オンコロジー教育推進プロジェクト）の協力を得た。また、本授業から派生した社会課題解決ゲーム製作活動は三年目を迎え、調査研究及び製作を継続している。

専門ゼミナールⅠ、Ⅱ（外川ゼミ）はＮＴＴデータ経営研究所の協力を得て活動を継続。交通文化協会、静岡県松崎町等とディスカッション等を通じて、訪日外国人の情報格差是正と再訪率の向上を追究している。また、三年間の研究を通じて養ったとアントレプレナーシップについて日経地方創生フォーラムにて報告した。

専門ゼミナールⅠ、Ⅱ（川喜田ゼミ）では、エンターテインメントの社会的効用について年間研究を実施。ウエルビーイングと高齢者のチケット購入サポートシステムについて吉本興業チケット営業本部に提案、意見交換する機会が得られた。

また専門ゼミナールⅠ、Ⅱ（中島ゼミ）では、音楽会社の株式会社 Being 所属の新人アーティスト認知拡大プロモーションの提案を行った。学生独自の分析・考察に基づいた企画提案は会社役員・アーティスト担当者から高評価を受け、２案が正式採用となり実施に至る成果を出すことができた。

ＰＢＬⅡ　コースＰＢＬは、学科共通テーマ「もうひとつの街物語」というテーマの下、３企画を展開した。エンターテインメントビジネスコース発足時から継続している「映像祭」では、「バラエティ番組の知らない世界」と題してＴＢＳの江藤俊久氏を招いて公開授業を実施した。また、全日本ブライダル協会の協力を得て、卒業生の結婚式を新８号館を舞台に実施。街調査においては、首都圏の街をエンターテインメント性や文化について検証した。

ＰＢＬⅢ　コースＰＢＬにおいては、卒業研究に向けて調査研究に勤しんだ。自らの研究テーマについて国会図書館等における詳細な調査や自らの仮説を立証するための根拠の収集等、フィールド調査を展開した。

エンターテインメントビジネスコース第七期生五一名が卒業論文を提出し受理された。成果をもとに、令和五年一月二五日、二六日、二日間にわたり、卒論報告会・口述諮問を開催、全員が卒業論文内容のプレゼンテーションを行おこなった。

一月一七日、ゼミ交流会を開催し研究成果を披露した。

【街文化プランニングコース】

○令和四年度

二年生のＰＢＬⅡは、表現に関わる者として、表現を自身の言葉で分析することを実践した。当コースでは「マンガ」「映画」「街に関係する論文」に関する記事を執筆。全ての原稿を教員が確認し、ブラッシュアップしていくことで文章に破綻がない内容に仕上げていった。コラム形式にしたことで、自身の考え方や見方を文章にまとめていく良い機会になったと考えている。

二年生の第一、第二クォーターでおこなわれたワークショップでは、アドビ・クリ

エイティブ・クラウドを使い、デジタルツールの基本を学んだ。街文化プランニングコースを解体する冊子を製作。教員インタビュー、大正大学周辺地図、街文化キーワードマップと学生が企画を考え、誌面にしていった。グループにわかれ、それぞれが担当するページを責任もって完成させた。第四クォーターでは池袋をテーマとした写真を制作した。商業施設、繁華街、芸術文化、街にいる人々、学生自身が池袋という街が持つ魅力を発見することをテーマとした。撮影、レイアウト、文章執筆と多様なことに取り組み、デジタル写真集を完成させた。最終日には雑誌「SPA!」の編集者である和田まおみ氏をゲストに招き、講評会を開く。現役の編集者からコメントをもらうことで、普段の授業とは異なる刺激を得ることができた。

三年生のＰＢＬⅢは、「ポートフォリオ」を制作した。「過去の課題」「自己紹介」「趣味嗜好の分析」をそれぞれの学生が行い、原稿を執筆した。また「過去の課題」に関しては、原稿の執筆と共に課題自体をブラッシュアップしていく作業も行い、作品の完成度を上げていった。かつて自身が製作したものを振り返る機会の意味を学生が実感し、作品のクオリティ向上に繋げた。

三年生のゼミナールでは、今年度から着任した影山裕樹任期制専任講師がローカルメディアに関する授業を展開した。普段話すことのない世代、国籍、文化の人々との交流を促す「コミュニティペーパー」づくりを通して、自らのテーマを深めていく内容となった。学生は街文化を生み出すために必要な心構えやプレゼンテーションの仕方、卒業後の進路に向けた情報収集、アクションの仕方などを身につけていった。

コース学生の課外活動としては、次世代の若きデータ人材を育てるために開催されているコンテストである「企業分析 AWARD2022」において、当コース三年生長岡未紗が所属するチームが見事優勝を果たした。新しいコースにおいて、魅力的な学生がいることは喜ばしい。

スタッフは、榎本了壱学部長、ヨシムラヒロム助教、影山裕樹任期制専任講師、サカキテツ朗客員教授、ヴィヴィアン佐藤客員教授、中島和哉任期制准教授(兼)、田島悠史専任講師(兼)に加え、今年度より川勝麻里非常勤講師が参加し、授業を担当した。

【学科研究室】

○令和四年度

今年度三月三一日をもって、蓮本ゆう子が退任。チューターは妻神諒、福田航星、要まいの三名に加え、新しく西村香菜子が着任（四月一日付）。

【学部学科の取組み】

○ＰＢＬⅠ（第三クォーター）

第一学年は三回目の第三クォーター、ＰＢＬⅠの授業を迎えることになった。今年度はコロナ禍対策で令和元年以来、屋内で実施していた「光とことばのフェスティバル」を二年ぶりに、中庭実施の形で復活した。

榎本学部長・森学科長と学科事務室が準備を進め、年度当初に学部教授会に諮り、学科事務室と調整をしながら、森学科長が中心となって運営を担い、一一月一〇日(木)に光とことばのフェスティバルを開催することとなった。

第三クォーターの内容・時間割を七月に一年生に発表。一年生ガイダンスを行い、始動した。今年度も一昨年・昨年度に続き、「光とことばのフェスティバル」の制作実習と導入ワークショップを併行して展開する七週間となった。

なお、今年度も学部長・学科長と学部学科専任教員全員の総力戦で取り組んだ。今年度から第三クォーターの実習系科目は、表現学部については教務部が担当となり、同部の全面的な協力の下、ＰＢＬⅠ・Ⅱ・Ⅲの準備・運営を進めた。

＊第一三回「光とことばのフェスティバル２０２２」

今回のフェスティバルは、スタート当初に立ち返ることを企図し、和紙で本体を製作し、中庭で造形する、という初年度に近づけた形態を企図した。とはいえ、初年度のような資材置き場も作業場などの作業スペースも確保はできないため、知恵を絞り、造形物が作成できる方法を編み出すことから始まった。

表現学部では平成二二年から「光とことばのフェスティバル」というイベントを毎年、開催してきた。「光」と「ことば」をテーマにした「参加体験型学修」の実習授業である。学部の全教員と一年生全員が取り組み、表現に関わる人材の育成のために必須となる基礎的な想像力、企画力・協働力・創造力・運営力を身につけることを目的に実施し、今年度で一三年目。だが、この二年間は、コロナ禍の中、校舎内で実施せざるをえない状況であり、安全対策のためフェス当日も分散登校で設置、フェスも

を実施。第一・二・四クォーターの「表現基礎ゼミナールⅡ・Ⅳ・Ⅵ」で実施している各コースの概説と基礎力養成の延長・補完を目的とするワークショップを展開した。二年次以降のコース選択を視野に入れ、第三クォーター七回授業のうち、前半三回と後半三回で別々に、二種類のコース授業を選択できるようにし、第4クォーターでの表現基礎ゼミナールⅥでの履修コースの選択へと継続させた。

光とことばのフェスティバルでの「協働」は、専門コースに進んで活用される基盤となる学び。この学びは、将来のコースでの学びの基礎となるべきものと従来から位置付けている。その気づきを明確化するために「導入ワークショップ」では、専門科目の学びとの接続を試みている。学部の学びの基底を通して培うものを「光とことば」で実践し、どう活用していくかの学びの場も「導入ワークショップ」としてＰＢＬⅠの実習の中に組み入れている。

○ＰＢＬⅡ・Ⅲ（第三クォーター）

クォーター制への移行とともに、昨年度より第二学年でも、第三クォーターにＰＢＬⅡが導入され、今年度はＰＢＬⅢが導入された。学科ＰＢＬとコースＰＢＬに二分し、両者が補完しあう相乗効果を企図するのは昨年度に続き同じである。Ⅱ・Ⅲとも佐藤哲至任期制専任講師が中心となり、尽力いただいた。各コースの学科ＰＢＬ担当教員からは、情報発信のために必要となるそれぞれの専門性を生かしたユニークなオンデマンド動画が毎週制作され、視聴した学生のライティングスキルの向上に大きく貢献した。それを前提に、学科の全教員が指導にあたった。

第二学年の学科ＰＢＬはアーカイブスサイトの拡張、つまり学生たちのセルフ・プレゼンテーション作成である。「自己を知り、自己の興味関心、自己の制作物」など自己アピールを中心とした、セルフ・プレゼンテーションを制作する。いかに自分を情報化するかが、柱の一つになり、大学での学びの成果と生活を提示することがローモデルになる。

第三学年の学科ＰＢＬはアーカイブスサイトの拡張、学生たちのポートフォリオ作りである。セルフ・プレゼンテーションを発展させ、各自のポートフォリオを作成し、いかに自分の活動を可視化するか。そしてそれを就職活動に活用できるか、という観点から、サイトを作り、プレゼンテーションを発信して、学びの成果を情報化するか、

zoom 配信などを取らざるを得なかった。そうした中、今年度は屋外展示に戻し、全員でフェスティバルに参加の形に戻すこととなった。

前述のように昨年度からねぷたの原点に立ちかえり、紙による光の造形を創り出すこととし、安全性を考慮し、材木を紙管に変え、紙管によるキューブをチームで六〇個、一四チームがアイディアを活かしてデザインを考え、本体に記す言葉を熟慮し、組み立て、「見立て」をし、作品のタイトルにそれらを集約。大学構内に設置し、フェスティバルの当日、日没後にそれらの造形物に光を入れ、中庭に光の競演がくりひろげられ、参加者を魅了した。神達知純副学長、榎本学部長両先生より講評をいただき、無事、フェスを終了。

一方、光とことばのフェスティバルの制作実習と並行して、「導入ワークショップ」

についての実習制作を行った。

どちらも興味深い成果が、完成した。二学年分の学科ＰＢＬを合わせて、四二五名一三六七本の記事がカルチャカフェブログにアップロードされ、学生と教員が閲覧できる状態となった。これまでコースだけに閉じられていた授業への学生の取り組みが初めて可視化され、表現学部の全体像が浮かび上がる成果を得た。今後はこれをベースとして、授業成果を共有する場所や、学外発信していくといったような展開が期待される。

ＰＢＬⅡ・ⅢのコースｐＢＬは、各コースの彙報に記してあるので参照いただきたい。

〔執筆者紹介〕

徳永　直彰　情報文化デザインコース、クリエイティブライティングコース准教授
森　晴彦　情報文化デザインコース、クリエイティブライティングコース教授
中島　紀子　情報文化デザインコース、クリエイティブライティングコース専任講師
佐藤　哲至　情報文化デザインコース、出版・編集コース任期制専任講師
中村　亮二　情報文化デザインコース、クリエイティブライティングコース教授

表現学　第九号

令和五年（二〇二三）二月一五日　発行

発行　大正大学表現学部表現文化学科
東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号
学科長　森　晴彦
電話〇三（三九一八）七三二一（代）

印刷　キンコース・ジャパン㈱池袋東口店

題字　赤平　泰処

本号は「表現文化学科の研究成果の公表と今年度の実践報告」を目的として編集・発行され、ＦＤ研究費により成果刊行している。